－資料再発掘－

縄文時代の灯明具？
－小型土器の用途のひとつとして－

白 鳥 文 雄

当センターでは平成11年度から、過去20数ヶ年に及ぶ発掘調査で出土した収蔵遺物の収蔵替え作業を行ってきた。この移動作業において、一瞥した程度ではあるが、過去に報告された多くの遺物に接する機会に恵まれた。特に特別収蔵庫に収蔵されていたセンター発足当時の復元土器については梱包のために直接手にするものも多く、報告当時は着目されていなかったようなことがらについても新たな視点で観察することができた。こうした観察を通して新たに発見できた情報もいくつかあったが、今回はその中の１点について取り上げてみたい。

今回紹介する資料は、昭和52年度に刊行した『熊沢遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第38集）に所収されている土器で、報告書中では、縄文時代前期の円筒下層ａ式の小型土器として分類された内の１点である。器高 7.8㎝、口径 8.8cm、底径 6.4cmの器外面及び底部に綾絡文が施文された完形品で、報文中では土器の特徴及び写真（134Ｐ、PL77－73－370Ｐ）は記載されているものの、実測図は掲載されていない。

今回、新たに取り上げた理由は、内面の炭化物の付着状況が最近認識されてきた平安時代の「灯明具」のものと酷似していたためである。

本資料における炭化物の付着を概観すると、炭化物は全体に黒色の煤状のもので、内外面とも数カ所に付着しており特に内面で顕著である。

最も付着の度合いが高い部分は、口唇部の小さな凹み部分を中心とした範囲で、内面の口縁部から逆台形状に付着がみられ、部分的に塊状のざらついた炭化物が付着している。また、外面の炭化物も、この凹み部分を頂点とする亀裂に沿って付着している。

凹み部分は、意図的な加工か被熱に起因したかは不明であるが、逆三角形に抉れ、器壁も薄くなっている。

（内面俯瞰）

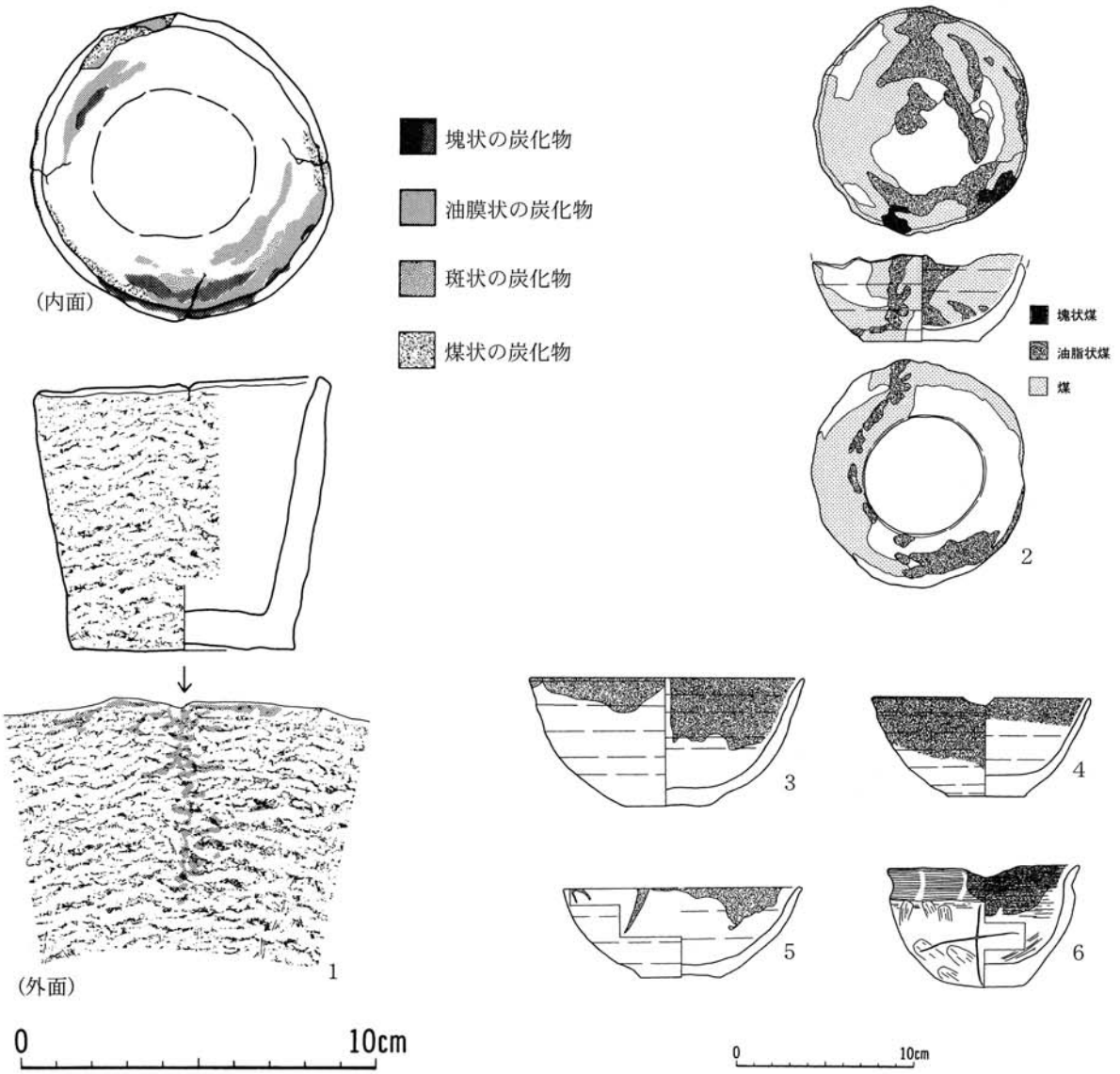
（外面）

（反対側）

図１　炭化物の付着状況

これらの炭化物は、土器の外面には被熱の痕跡がないことから、いわゆるスープ状炭化物と呼称される煮炊きに伴うものとは考えられず、むしろ、土器内部における油脂または樹脂の燃焼に伴う煤状炭化物と考えたほうがより妥当である。燃焼部分としては最も被熱の痕跡が著しい口唇部の凹み部分が考えられる。また、外面の炭化物もタール状のものが滴下したか、あるいは亀裂からしみ出た油分によって多くの煤が吸着したものと考えられる。

「灯明具」として認識された平安時代の土師器（図２－２～６）と比較してみると、本資料と同様に口縁部付近に炭化物の付着が集中していることが理解される。特殊な例かもしれないが、２は非常に多量の炭化物の付着が認められる土器で、これも本資料と同様に塊状の炭化物の付着が目立つものである。また、他の平安時代のものも口唇部の一部に凹みがみられるものが多い。ただし、坏や皿のような口径が大きいものを使用していることから、本資料や２のように外面に垂下したような炭化物の付着は少ないようである。



（２～６、朝日山(1)遺跡出土
『朝日山遺跡Ⅲ』県埋文報第156集）

図２　炭化物付着状況及び平安時代の「灯明具」

これらの状況から、本資料は、平安時代の「灯明具」に類似または同様の使用が考えられる。

ただ、本資料の確認後に、特別収蔵庫内の小型の円筒土器及び他の時期の小型土器を概観したが、口縁部に小範囲の炭化物が付着しているものは数点あったものの、内面に明瞭な痕跡のみられるものは確認できなかった。特別収蔵庫内の限られた資料の検索であったことから、他の収蔵庫内の破片資料や、最近の出土資料にはほかにも存在する可能性は考えられる。しかし現段階では、このような痕跡を持つ土器は、知り得る限りではこの１点である。このため、はたして日常的な「灯火」用として機能していたかどうかは疑問が残るところである。

ここで推論にすぎないが、本稿を書くに当たって思い当たった疑問点と所見を述べてみたい。

まず、用途については、「灯明具」的な使用が妥当と考えられるが、確認点数が少ないことから、現段階では特殊な類と考えたい。「灯火」用とすれば、祭祀を含め特別な時に使用されたものの可能性が高く、また他の使用法としては、たとえばアスファルト等の膠着剤の軟化・溶解用の熱源などが考えられる。

次に燃料となる油脂に関しては、ある程度の流動性を持ったものが妥当と考えられる。鉱物性のもの（石油類）は揮発性があり使用時までの保存に難があり、また、大型獣や海獣の油脂は常温で固結することから、「魚油」がもっとも可能性が高いものと考えられる。ただし、その当時に植物油の圧搾が行われていたとすれば、この限りではない。

なんら結論めいたことは述べらず、単に資料紹介の域に留まってしまったが、縄文時代前期に平安時代の「灯明具」と同様の使用痕跡を持った土器が存在していたことは、小型土器の用途について考える上で何らかの手がかりになるものと思われる。

今後、縄文時代の各時期を問わず、類似資料の増加が期待されるところであり、個人としても、折に触れ類例を集めていきたいと考えている。

また、自分自身も過去において多くの見落としがあったことも反省材料として、出土土器の観察においては、施文原体や土器型式に終始するだけではなく、さまざまな視点からの観察所見も今に増して記載することを提案したい。